

『長生殿』 訳注（八）

竹村， 則行
九州大学大学院人文科学研究院文学部門：教授：中国文学

<https://doi.org/10.15017/9619>

出版情報：中国文学論集. 31, pp.91-105, 2002-12-25. The Chinese Literature Association, Kyushu University
バージョン：
権利関係：

『長生殿』 訳注（八）

竹 村 則 行

凡 例

- 一 『長生殿』本文の底本には、現在最も流布している徐朔方氏の校注本を用いたが、厳密な校訂を施した呉梅校本（劉世珩『彙刻伝劇』所収）を始め、次の第二項に掲げる諸書も随時参照した。
- 二 本訳注に当たり、出典の確認や本文の解釈等に以下の諸書を随時参照したが、訳注の際にはこれを一々明示していない。
 - 塩谷温『国訳長生殿』（『国訳漢文大成』所収、一九三三年）
 - 徐朔方校注『長生殿』（人民文学出版社、一九五八年）
 - 曾永義『中国古典戲劇選注』所収『長生殿』（国家出版社、一九七四年）
 - 蔡運長『長生殿通俗注釈』（雲南人民出版社、一九八七年）
- 三 本訳注では、主に前記参考書に於いてなお未注の故事出拠等について注出する事にした。全般的総合的な注については、康保成・竹村則行『長生殿箋注』（中州古籍出版社、一九九九年）を参照されたい。
- 四 「曲牌名」に続く「唱」部分の訳出は、時にこの間に挟まれる短い科白や襯字をも含めて、「ゴチック文字」の体裁で示した。また、演員の扮装や動作、および唱や動作の主体を示すト書きの部分は、底本の通りに小字で示した。
- 五 訳語のうち、原文の「介」「科」（しぐさ）は、一種の術語として、そのまま「介」「科」として訳出した。
- 六 訳文は、「ゴチック文字」で示した「唱」部分の訳出を含め、荘重な韻文の形式を採らず、意味内容の解釈を重視しつつ、努めて

平易な日本文となるように留意した。「唱」部分の韻文訳出は今後の課題である。それでも、訳者の誤解や力量不足による生硬な訳文を免れなかったかも知れない。諸先生の忌憚無い御指教をお願いする次第である。

七 前稿「長生殿」訳注(一〜三、六〜七)は『中国文学論集』二六〜三十号(九州大学中国文学会、一九九七〜二〇〇一年)に訳載し、また、同(四・五)は『文学研究』九十七〜八(九州大学文学部、二〇〇〇〜〇一年)に訳載した。

八 本訳注(八)(第二十九〜三十二齣)は、二〇〇一年一月〜二〇〇二年一月に行われた九州大学大学院での『長生殿』演習資料を基にして、竹村が新たに浄書した。この間の演習に参加した院生は次の通りである。

蕭 燕婉・王 毓菱・河野 真人・垣見美樹香
土屋 聡・景 献力・西田真理子

第二十九齣 聞 鈴

(丑が内で叫ぶ介) 兵士らは道を急いで、先で待つておれ。(内で銅鑼を鳴らして応ずる介)

(丑) 陛下、馬にお乗り下さい。(生が馬に乗り、丑が随行して登場)

〔双調〕〔武陵花〕宮車は巡り行く。道中、幾多の悲哀の情を覚えたことか。雲のかかった山々がたたなづく貌は、千々に乱れる我が愁いのよう。秋風に木々の枯れ葉が無数に落ち、空行くはぐれ雁の鳴き声は悲しみをいや増す。朕は馬嵬を出発してから、辛酸の連続であった。先頃、朕は使者を遣つて宝璽を賜ひ、帝位を太子に譲つた。旅すること一ヶ月、やがて蜀も近い。嬉しいことに賊軍もようやく遠のいたので、行程を緩めてゆこう。ただ、この鳥が鳴き花は落ち、青く澄んだ山河を眼にしては、朕の悲哀をかきたてるばかりだ。どうしたらよいものか。(丑) 陛下は道中の風雨にすっかりお疲れになられたのです。どうか気晴らしをなさつて、あまり悲しみなさいませぬ。(生) おお、高力士、朕は貴妃と、坐ればひじかけを並べ、歩いては肩を寄り添わせてきたが、今日慌ただしく西方に御幸し、彼女を失う結果となつてしまつた。これを寡人がどうして捨ておかれようか。(涙する介) 心痛むことを

思い出し、涙がどつと流れ落ちる。馬東坡の方を振り返れば、彼女を失った恨みが胸をふさぐ。(丑)前方が蜀の棧道です。陛下には馬の手綱をしつかりと引いて、ゆっくりとお進み下さい。(生)たなびく旗が夕日を背にして、風に揺らぐ。馬は険しい山道を行き、一時も止まることがない、一時も止まることがない。見れば、黒雲がどんよりとして天空は薄暗く、猿が断腸の声をあげ、子規こきりが血を吐くように鳴いて、聞くのも怖いくらいだ。これは何と人をぞつとさせ、何と人を苦しめることよ。²⁾かくも物寂しい中、この峨眉山のふもとは道行く人も少なく、冷たい雨や横なぐりの風が顔に吹きつける。

(丑) 雨が降ってきました。どうか陛下には暫時剣閣の上って雨宿りをなさいませう様。(生が馬を下り、高殿の上って坐る介) (丑が内へ向く介をする) 兵士達よ、しばらくここに駐留し、雨が止んだら出発する。(内で応ずる介) (生)「独り高殿の上って見やれば心が傷み、眼下に広がる蜀の山河に、貴妃を失った恨みが果てしなく広がる。何処ともなく吹きつける風や雨、その一風一雨に断腸の思いがする。」(内で鈴が鳴る介をする) (生) おや、あちらから絶え間なく音が響いて、喧しくてたまらない。高力士、一体何の音だろう。(丑) これは樹々に降る雨音が、軒先の風鈴の音にまじって、風に吹かれて響いているのです。(生) おお、この鈴の音は何とすばらしいことか。

〔前腔〕しとしと、リンリンと響く音に、心は物悲しく沈む。遙かに聞けば、鈴の音は山の樹々の向こうから、風雨に混じって高く低く聞こえてくる。しとしと降る雨音にリンリン響く鈴の音、それと共に、愁いに沈む私の血の涙もぼたぼたと流れ落ちる。この傷心の時に、うたた楊貴妃の墓が思いやられる。ここでは白楊は侘びしく音を立て、雨が激しく降り、今ごろ貴妃の孤独の靈魂は寂しい思いでいるだろう。鬼火が寒そうに光り、草場の陰には螢が舞っているであろう。さても悔やまれるのは、非常の際に貴妃を亡くし、貴妃を亡くしたことだ。私一人がこの世に残ったが、実のところ生きていたいとも思わない。たおやかな貴妃の霊に告げる、私も早晚そなたあの世で一緒になるであろう。こうして人氣のない山に向かつて慟哭すれば、鈴の音がそれに相應じる。剣閣の山道は、こつこつと険しく、まるで私の腸が捻れて恨みがどこまでも続くかのようである。

(丑) 天子様、あまりお嘆きになりませぬ様。雨が止みましたので、この高殿を下りましょう。(生が高殿を下り、馬に乗る介をする。丑が内に向かう介) 兵士ども、出発だ。(衆が内で応ずる介) (丑が生に随って行く介) (生)

〔尾声〕 遙かな行路に愁いは尽きない。貴妃を弔うことと国都を後にすること、いずれも心に懸かつて離れない。
〔合唱〕 見渡すかぎり、雨上がりの蜀の山々がどこまでも青々と続く。

(生) 劍閣山の峰が千里に連なる。

駱 賓王

俗世を遠く離れてここに至れば、いよよ心傷む。

羅 鄴

空しく労力を費やして、天子の車は風雨をついて行く。

秦 韜玉

雨中に鈴の音を聞けば、涙が幾筋も流れ落ちる。

杜 牧

注

(1) 原文は「長空孤雁添悲哽」。元・白樸「梧桐雨」第二折に「天淡雲間、列長空數行征雁」と。

(2) 原文は「兀的不慘殺人也麼哥、兀的不苦殺人也麼哥」。元・蕭德祥「殺狗勸夫」第二折に「兀的不凍殺人也麼哥、兀的不凍殺人也麼哥」と。

第三十齣 情 悔

〔仙呂入 双調過曲〕 「普賢歌」(副浄が登場する) 馬嵬坡はうら寂しく、土地神も活気がない。靈廟の扉はくずれかけ、香を焚く者もいなく、三種の供物を誰が神に供えて祭るであらうか。

私は馬嵬坡の土地神である。ここでは、これまで香が盛んに焚かれていたが、安祿山の乱によってこの村人がみんな逃げたために、靈廟は荒れ果て、香も絶えてしまった。今や幽霊がうようよしており、もめ事が起こるといけないので、あたりを一回りして来よう。まことに、「福の神に見放されれば、悪鬼が横行する」とい

うもの。(退場するそぶり)(貴妃の靈魂が登場する)

「双調「搗練子」命を絶たれた怨恨はつねつねと幾重にも重なって続き、永久に黄泉に眠ったまま、醒めること引子はない。わが靈魂は寒月にけびる露の中に寸断され、風に吹かれるまま、人氣のない庭をすーっと過る。

「霓裳の音曲が明け方の風を逐って消え、絶世の美女はあたら生命を絶たれてしまった。憐れにも身体は死しても心情はなかなか滅びず、尽きせぬ恨みがいつまでも脈々と続く。」私は楊玉環の靈魂です。馬嵬で災難に遭った後、幸いに冥府の東岳帝君の詔を受け、この駅舎に棲むことを許され、地獄に墮ちることを免れました。
(悲しむ介) 思えば、生前に天子と西宮で楽しく過した頃、何と深い恩寵を受けたことでしょう。今日その美人の命は失われ、遺骨は怨みにむすばれ、うら寂しい駅舎の垣根に、孤独の靈魂がさまよっている。見れば、月はおぼろに星はまばら、加えて夕暮れの頃合い、何と物悲しい風情でしょう。

「南曲「三仙橋」人も無く静かな夜の馬嵬駅を、私が雲を追い、月と共にひそやかに歩めば、時に自分の影が現れたりする。暗やみの中、心落ち着かぬまま、急に昔の美貌を思い起こしては、そのたびに涙にくれる。思えば以前の私は何と美しかったことか、思えば以前の私は何と艶やかにお化粧していたことか。それは本当に絵に描いたよりも美しかったのだ。それが今や跡も留めずに亡くなってしまい、早くも冷たい骸むくろになろうとはどうして想像できよう。(悲しむ介) いま、私はつらくも亡靈に変わり果てたが、これが楊貴妃の姿だと誰が分かるだろうか。

(涼する介)(袖から螺鈿の小箱を取り出す介)この黄金の釵と螺鈿の小箱は陛下が結婚の記念に賜ったもの、墓から取り出したので、月明かりの下でながめてみましょう。(副浄がひそかに登場し、指さす介)これは楊貴妃の靈魂だ。何を言っているのか聴いてみてください。(背を向けて立ち、聴く介)(巨が金の釵と螺鈿の小箱を見つめる介)

「前腔「換頭」この金釵の頭が二つ並び、小箱が同心形に合わさっているのを見るにつけても、二人の愛情がひたすら黄金や螺鈿のように堅く不変であるのを願ったのに、このように釣瓶縄がぶつとりと切れるように断ち切れようとは思いませんでした。もし二人の縁が切れるのを知っていたら、どうしてこの様な心傷む形見の品を残したりしたのか。思い出すのは、結婚の夜に小箱が清らかに香り、金釵が月明かりに輝いていたように、夜通し天子の寵愛を賜ったこと。(悲しむ介) その深い恩愛を思い起こすと、私はどうして黄泉路で安らかに瞑目できよう。(哭く

介) 悲痛に堪えぬのは、永遠の愛を誓つたあの夜の金釵と小箱とが、今や私の悲嘆のもととなつてしまつたこと。

(副浄が背を向けて聴き、うなづく介をする)

(旦) ああ、私楊玉環は生きては惨禍に遭い、死しては無実の怨みを抱く。或いはこの私が前過を悔い改めれば、救われて昇天する日が来るのかも知れない。やめましよう。(悲しむ介)

私が生前にしたことを思い起せば、罪作りでなかつたものはないのだから。それに、兄弟姉妹が権勢を笠に着て、天まで届く罪を犯したのも、全ては私のせいなのだから、どうして懺悔し尽くせましよう。まずは、この星月夜の下で、天に向かつて祈りを捧げることにしましよう。(天に向かつて拝礼する介)

〔前腔〕 私は星や月に対して至誠の心を発し、天地を拜して頭を垂れて深く反省する。天帝よ、天帝よ、思えばこの楊玉環は、罪業を重ねて罰を受け、災禍に遭いました。今夜こそ、その罪を懺悔し、その罪を告白します。願わくは天帝のご明察によつて私をゆるされ、私の無実を証言して下さいましよう。私のひたむきな愛情は、情欲の河に溺れて、まだ醒めておりません。これを申しては後悔しても及びませんが、天帝だけが私の無実を証明できます。たとえこの骸が転生できなかつたとしても、私は黄泉路ですつと天帝のお許しをお待ち申し上げます。土地神が言うには、私は元來蓬萊宮の仙女で、罪を得て人間世界に落とされたのだと。天帝よ、私はかくも罪業深いのに、どうして蓬萊宮の仙女に復帰することを願ひましようか。ただ楊玉環の曾ての配偶者(明皇)を私に返して下さいましようとお願ひするだけです。

(副浄) 貴妃よ、土地神ならここに。(旦) これは土地神様。(副浄)

〔越調 過曲〕「憶多嬌」私は月明かりの下、一人歩いていると、あなたが深刻に祈つていたので、一部始終を聴きましたが、あなたの懺悔ですべての罪はきれいに消え、天帝を感動させ、天帝を感動させ、昔日の明皇との誓いを再び結ぶ日が来るものと思ひます。

(旦) 土地神の憐れみに感謝します。ただ私めは、

〔前腔〕 罪業が深くまとわりつき、前世の善業はわずかです。今夜は空しくも悔恨の念が生じましたが、私の向かう黄泉路は遙か彼方、天上とは遠く離れています。(悲しむ介) 言い出せば心は傷み、言い出せば心は傷み、ただとこしえに続く恨みとなります。

(副浄) 貴妃よ、悲しむことはない。そなたの千里の通行に便利なように、私がいま通行証を出してあげよう。
(通行証を渡す介をする) お聞きなさい。

〔鬪黒麻〕 あなたはもと蓬萊宮の仙籍に名前があつたのですが、地上の宮殿に落とされた為に、痴情に取り憑かれたのです。そこで歡樂の時を過ごし、苦痛を経験した為に、人間世界を後にしても、天上界に帰ることが難しかったのです。ところが嬉しいことに、今夜あなたがその夢から醒めたので、あなたをどこへでも自由に行かせることにします。もう迷い道に迷わず、もう迷い道に迷わず、早く本来の道に戻りなさい。

〔前腔〕 (巨が通行証を受け取り、感謝する介) 土地神のお導きに深く感謝します。怨恨にまみれたこの靈魂は、どうして仙界に帰れまじょう。(背を向ける介) これから私は、風にまかせ、道にまかせて行きまじょう。ゆらゆらふわふわと日中は隠れ、夜中に行き、星や月をたよりに、あの金釵と小箱の思い出の場所を尋ねて行くのです。再会すれば、再会すれば、二人の心の悲痛が思いやられます。

(副浄) 私はこれで。

(旦) 明け方の風、有明の月に、心はしんみりとする。

(副浄) 月影の下に貴妃の靈魂の独白を聞いて、本当に憐れに思つ。

(旦) 昔日の宮殿での栄華、そして今日のこの恨み、

(副浄) 貴妃はひたすら玄宗との因縁を尋ねてさまよつのみ。

韓 琮

李 商隱

司空 図

方 干

注

(1) 原文は「你本是蓬萊籍中有名」。唐・李隱「瀟湘録」に「勅謫仙子楊氏、爾居玉闕之時、常多傲慢、謫塵寰之後、轉有驕矜」と。

第三十一齣 勦 寇

〔中四〕「菊花新」(外が軍装して、四名の兵士を率いて登場)私は誤つて新たな任命を賜つて高位に昇り、印を胸に掛けて総帥の高台に上ることになった。大抜擢に恥じ入りながらも、国家の安泰を敢えて一身に担うことを誓つものである。

「戦旗を建て角笛を吹いて整然と行進する。私が三十歳で將軍に抜擢されたのは皆の羨むところ。国家は万金をはたいて勇士の死に報い、この身は一剣を帯びて君恩に答える。」私は郭子儀、忝なくも天恩を賜り、特に朔方節度使に任命され、兵を率いて叛賊を討伐することになった。今や明皇は四川に巡幸され、今上皇帝が靈武にて即位された。このような国家多難の時こそ、正に私が勲功を建てる好機である。私は必ずや賊軍を一掃して長安・洛陽を取り戻し、唐王朝を復興して朝廷の威儀を再生させよう。それでこそ、一生の宿願が遂げられるというもの。兵士ども、今日は黄道吉日、いざ挙兵して進軍するのだ。(衆が応じ、鬨の声をあげ、号令を発して進軍する介)(合唱)

〔中四〕「馱環着」我らは鸞の御旗と羽根飾りをつけた御車を擁し、鸞の御旗と羽根飾りをつけた御車を擁し、土埃を蹴立てて進軍する。馬には戦いの鞍を掛け、将兵は分厚い鎧を身につけ、美麗な戟や弓が鮮やかに輝く。軍律は明瞭でよく整っており、どの兵士を見ても、威风堂々とした將軍ばかり。まことにかの孫武や呉起も比べものならないほどであり、必ずや安祿山の妖毒をはらい清めるであろう。我らは策謀をめぐらし、軍陣を整え、一戦で京都を取り戻し、天下に安泰をもたらすのだ。(一斉に退場)(丑と未が番人の將軍に扮し、兵士を連れて登場)

〔前腔〕屈強で勇敢な兵士を頼みとし、屈強で勇敢な兵士を頼みとし、太鼓の音とともにやって来た。布陣は山を動かし、氣勢は海をもひっくり返すよう。嵐雲は断えず湧いて、鬼神が号泣するかのよう。到るところに血腥い風が吹き、人を芥子粒のように殺す。我らは大燕皇帝の大將史思明、何千年である。唐では新皇帝が即位し、郭子儀に命じて攻めてきた。我ら二人は命令を奉じて、この敵を迎え撃つのだ。(未聞けば、郭子儀軍は頗る威勢がよい

とのこと。我ら二人は二隊に分かれ、一隊が交戦しているときに、もう一隊が横から撃つて出れば、必ずや大勝するであろう。(丑)なるほどもつともだ。我らの大小の軍隊は、ここで二隊に分かれて突撃するのだ。(四名の雑が応じ、隊を分けて行進する介をする)一手に分かれて敵を迎え撃ち、まず第一戦で敗れるふりをし、旗はやぶれ、哀しげに太鼓を鳴らすが、そのすきに別の一隊が勇を鼓して先駆し、威を奮って敵將の首を奪うのだ。

(末が大勢の兵士を率いて先に退場)(外が兵士を連れて登場し、丑と一戦を交える介をする)(丑)大将は何という名前だ?(外)

我こそは大唐王朝の朔方節度使郭子儀であるぞ。天子の軍隊のお出ましに、お前は馬を下りて縛られようとせず、いつまで待たせるつもりか。(丑)つべこべ言わずに、馬を出せ。(戦う介、丑が敗れる介をし、走って退場)(末が

兵士を連れて登場し、外を遮って交戦する介)(外)賊將め、早く投降しろ。(末)郭子儀よ、お前が俺様に勝てるか?

(外)ほざきな。(戦う介、丑が再び登場し、乱戦の様相)(丑と末が大敗し、逃げて退場)(外)喜ばしいことに賊將が大敗し

て逃げおつた。ここは長安から遠くないので、夜を徹して一気に進むぞ。(衆)了解しました。(進む介)(合唱)

「添字
紅繡鞋」

一全軍ひとしく口を開けて笑い、ひとしく笑い、道路いっぱい旗を争って並べる、争って並べる。大将

を囲んで、意気があがる。まことに勲功でその肖像画が宮中に掲げられるであろう。書類を急いで決裁し、急いで

決裁し、勝利の知らせを宮殿に報告する、勝利の知らせを宮殿に報告する。

〔尾声〕長安や洛陽は勝利の吉報を待ちわび、皇祖の靈廟は暗雲が晴れて再び日月を見る。こうして唐王朝は再興

されて、幾万年も続くであろう。

戦場では悲しく殺伐とした風気が山河に満ちている。

戦いに勝つのは、昔から將兵が協和協調するからである。

前方に京都を望んで凱旋すれば、

連山に明月がかかる夜、軍隊は武器の音も立てず、穏やかにしずしずと行進する。

白居易

胡曾

賀朝

杜荀鶴

第三十二齣 哭 像

(生が登場)「蜀の山や河は青く澄みわたり、これを見るにつけても、朝な夕な懐古の情にくれる。ひたすら恨むのは、貴妃のような佳人を二度と得られないこと。彼女のよな傾国傾城の美女がどこにいよう。」寡人は成都に行幸して、帝位を太子に譲つて上皇となつた。嬉しいことに郭子儀軍が大いに活躍し、ほどなく賊軍を平らげた。ただ残念なのは、貴妃が国のために身を捧げたのに、それを表明する術がない。そこで特に命じて成都に貴妃の靈廟を建て、腕のよい職人を選んで梅檀の香木に貴妃の像を彫らせた。高力士に命じてその像を行宮へ運んで来させたので、寡人自らこれを靈廟へと送つて供養することにしよう。まもなく到るであらう。

(嘆く科) ああ、貴妃を思えば、

〔正宮端正好〕寡人は、彼女との深い誓いを反古にし、彼女の広い愛情に背き、比翼や鸞鳳にも比すべき二人の仲を無理矢理に引き裂いた。貴妃を生涯決して捨てないなどよくも言えたもの。それが途中で挫折しようとは思ひもしなかつた。

〔滾繡毯〕恨みが残るのは、賊軍の来襲が急で、出発が甚だ慌ただしかつたこと。三千を数える警護兵は西の延秋門を出る時、早や騒然としていた。傷心のまま旅程を進め、馬嵬の駅舎まで来ると、突然に兵士達の雷のような呐喊の音が一齐に起こり、見れば、水も漏らさぬ鉄桶のごとく、四方を刀や槍が包囲していた。警護軍の主将(陳元礼)はぶてぶてしくも益々威丈高になり、眼を見開いて、この勢威を無くした天子に迫つたが、私は争う気力も無く、ついに手も足も出せず、どうしようもなかつた。

恨みに思つるのは陳元礼が、

〔叨叨令〕車馬を出発させようと思せず、事態をどこまでも引き延ばしたこと。ために彼らは自分の主張に固執し、まもなく暮々と大声で諍ることになり、更には矛や戟を並べ立てて、幾重にも取り囲んでどつと押し寄せてきた。彼らは貴妃の生命を直に要求し、貴妃はあつという間に命を落としてしまった。(哭く科) 何と痛ましいこと、何と

痛ましいこと。貴妃は私の前から消え失せ、残るは私の孤寂の姿だけ。

寡人は今となって大いに後悔している。

〔脱布衫〕 頗る恥じるのは、その時寡人は顔を掩って悲しむだけで、花や月のような貴妃を救えなかったこと。寡人は全く意気地がなかったのであり、彼女をむざむざ手放すべきでなかった。

〔小梁州〕 朕がその時、もしこの身体をはって抵抗していたら、陳元礼は必ずしも君王にたてつくことは無かつたであろう。たとえ彼がたてついたとしても、何ほどのことがあるう。ために私が殺されても、あの世で貴妃と永遠に一緒になればよいではないか。

〔么篇〕 今、寡人は一人無事に生きているが、貴妃のいない余生に何の楽しみがあるう。ただこうして、涙がしとどに流れ落ち、愁いを幾度も繰り述べるのみ。(哭く科) 我が貴妃よ、あの世にいった貴妃、この世に生き残った寡人、この恨みをどうして償うことができよう。

(丑が二名の宮女、二名の宦官と共に、香炉や花飾りのある旗を捧げ、雑が持ち上げる楊貴妃像を率いて、楽器を鳴らしながら登場) (丑) が生に見える科) 天子様に申し上げます。楊貴妃様の像をお迎え致しました。(生) 早くここまで通せ。(丑) 承知しました。(部屋を出る科) 仰せである。貴妃様の像をこれへ。(宮女) かしこまりました。(像を持ち上げて進み、生に直面させる。宮女が跪き、像を支えて少しかがむ科) 楊貴妃様がお目通り致します。(丑) 楽にせよ。(宮女が起ち上がる科) (生が起立し、像に向かつて哭く科) 我が貴妃よ、

〔中呂上小楼〕 ずっと別離のままであったが、にわかになれたの美しい姿に会えた。寡人はそなたに無実の罪を述べ、驚きや愁いの気持ち語りたと思う。(近づいて叫ぶ科) 貴妃よ、貴妃よ、どうしてそなたは、微笑みを返さず、返事もせず、身をこちらに寄せてくれないのか。(像をよく見て、大声で哭く科) おお、何とこれは梅檀に彫った神像だったのか。

(丑) 御車の用意が整いました。天子様は馬に乗り、貴妃様を霊廟までお送り下さい。(雑が衛士に扮し、供物の瓜や旗、貴妃用の傘や扇、車駕の隊列が登場) (生) 高力士、詔を伝えよ。馬は左、車は右に寄り、朕は貴妃と並んで行くのだ。(丑) 承知しました。(生が馬に乗り、衛士が貴妃の像を持ち上げ、隊を整えて導いて行く科) (生)

「幺篇」ころと貴妃像を載せて動く御車に、寡人はびつたりと寄り添い、ゆるゆると力無く馬の鞭を振り上げる。昔のように御車は並んで進み、貴妃と肩を並べ、その影は二つになるが、心は痛み悲しみ、自ずから貴妃生前のことが思い出される。思えばその当時、貴妃と轡を並べて遊山に出かけた頃、どうして挙げ句の果て、このように夫婦が並んで行くことになったのか。

（到着する科）（丑）靈廟に参りました。陛下には馬をお降り下さい。（生が馬から降りる科）侍従ども、貴妃を廟の中へ送るのだ。（御車の一隊が退場）（侍従が貴妃の像を持ち上げ、宮女や丑と共に、生のもとについて進む。生が廟の中に入って像を見つめる科）

「滿庭芳」私はこの廟に向かい、顔を上げてじつと見る。ここは貴妃生前の西宮や南苑のような輝く御殿に比べてどうであろうか。ここどこに鴛鴦や芙蓉を刺繍したカーテンがあるというのか。ただ虚ろに見えるのは、ゆらゆらと高く張り巡らされた幔幕、土人形の宮女が二人ずつ、そして絹の衣裳をまとった女官が二人ずつ。旗はひらひらと翻るが、貴妃の靈魂を蘇らせることはなく、却って私の心を揺さぶり、ふるわせるだけである。

（生が前に進み、坐る科）（丑）程よい時刻でございます。どうか貴妃様昇殿のご命令を。（生）宮人たちよ、貴妃のお世話をして昇殿させるのだ。（宮女が応ずる科）かしこまりました。（内で楽器を演奏し、宮女が貴妃像をかかえて生に直面させ、先程のように少しかがむ科）楊貴妃様がお礼を申し上げます。（丑）樂にするように。（生が起立する。内で太鼓や管弦楽を演奏し、皆が像をかかえて座席に座らせる科）（生）

「快活三」朕の眼には、宮女が集まって彼女を取り囲み、装い新たな彼女を团扇でおおっているのが見える。あたかも結婚の初夜に閨房に入る時のようだ。（悲しむ科）しかし、どうして彼女は、一人寂しく、この彩ある薄絹の帳の中に坐っているのだらう。

（丑）天子様、貴妃様が着座されました。（生）香をもって参れ。（丑が跪いて香を差し上げ、生が香をつまむ科）

「朝天子」ゆらゆらと上る香の煙り、きらきらと光る燭台の明かりに、急に以前の事が心中によみがえる。あの時、長生殿の香炉のそばで、二人は夜空の牽牛織女星に対して深い契りを交わした。それが誰が知ろう、誓いはでたらめとなり、二人が生死の世界に分かれて、参星や商星のように二度と会えなくなるとは。片時も忘れないと誓った

生前の誓いを寡人は虚ろに思い出す。今では、私はこちら側、そなたはあちら側、この「断頭香」(別れ香)を手にすれば、一層悲惨さが募る。

高力士、酒をこれへ。貴妃に一献進ぜよう。(丑が酒をささげる科) 最初の御神酒でございます。(生が酒を捧げて哭く科)

〔四辺静〕私が酒杯を手持って、そなたはどうしてその赤い唇でこの手から酒を受けることができよう。私は心の悲しみを抑えきれず、「貴妃よ」と呼びかけて、手ずから御神酒を供えれば、涙がぐんぐん溢れて杯に満ち、葡萄酒の美酒を半滴も注ぐことができないほどである。

(丑が杯を受け取り、貴妃像に献杯する科)(生 我が貴妃よ、

〔一般涉〕「要孩児」この一杯は、痛ましくも馬嵬駅で身まかったそなたが、彼方から来て、私から酒を受けることをのぞむもの。当時は騒乱の最中、そなたを一盛りの土で葬っただけで、神水をかけてやることすらしなかった。今日は、誅伐できなかつた反乱軍を恨み、そなたが辛い思いをして国の為に命を捧げたのを弔うことにしよう。幕に覆われた貴妃像に対面すれば、生けるが如きそなたの美しい容貌が空しく映え、そなたの靈魂がどこかに飛んでいるのが一層痛ましい。

(丑が更に神酒を捧げる科)二杯目のお神酒でございます。(生が神酒を捧げて哭く科)

〔五殺〕なみなみと注いだ神酒を再び捧げても、恨みは暗く沈んで尽きない。天も地も真つ暗な中、寡人は茫然としてそなたをながめる。今日、そなたの靈廟はこの西蜀にあるが、いつになったら都の北邙の御陵に葬ってやることのできるだろう。(丑がまた杯を受けて貴妃像に捧げる科)(生が哭く科)寡人は、そなたと同じ墓穴に葬られ、一株の墓場の連理の木となり、一対の墓の上に舞う鴛鴦の鳥になりたいと思つた。

(丑がまた酒を捧げる科)最後のお神酒でございます。(生が酒を捧げる科)

〔四殺〕そなたの靈魂を祭る儀礼は終わったが、心中を語れば話はいつまでも尽きない。そなたの愛くるしい眼差しは動かないが、寡人の苦衷のさまが見えているだろうか。寡人がそなたとの金釵細盒の永遠の誓いに背いた為に、白絹でそなたの命を奪い、恨みがどこまでも尽きない黄泉の国へ送ることになった。(丑が杯を受けて像に献上する科)

(生が哭く科) ここに、悲しみの余り、胸を叩いて思えば、まるで刃物で肺腑を抉り、火炎で肝腸はつらにを焼くかのよう。

(丑や宮女、侍従が共に哭く科) (生が木像を見て驚く科) おお、高力士、見よ、貴妃の顔から涙が流れ落ちてはな
いか。(丑が宮女と一緒に見る科) おや、神像は本当に顔中に涙の痕があります。不思議だ、何とも不思議だ。(生が
哭く科) おお、我が貴妃よ、

二三殺 見れば、貴妃のおとがいに涙が垂れ、目にはいつぱい涙を溜め、ぼろぼろと神座の上に涙が流れ落ちてい
る。まさしくこれはあの、貴妃が朕の衣を引つ張って死を懇願した時の愁いに満ちた顔であり、貴妃が当時を思い
出して、声も出さずに嘆き悲しんでいるのである。その傷ましきは、真にこの世に二つとて無いもの、この人形
が涙を流すのは言つまでもないが、鉄の心を持った私とて断腸の思いなのだ。

(丑) 天子様、どうか悲しまれずに。私どもが貴妃様にご挨拶致します。(宮女や侍従と共に哭いて拝礼する科) (生)
二二殺 見れば、老宦官の高力士が貴妃像の前に両膝をつき、老宮女が地に伏して傷み悲しんでいる。「貴妃様、こ
げんつるわしつ」とも言えず、それぞれ悲しそつに木像に対している。(哭く科) 貴妃よ、そなたが生前、昭陽殿で彼
らに施した恩恵が深かったので、今日彼らはこの錦江の祠廟で、そなたの遺愛を偲んでいるのだ。もの悲しい風が
吹き、腸はつらにがちぎれるような杜宇かきうの声、壁の半ばを斜陽が照らしている。

(丑) 天子様、貴妃のために紙銭をお焚きください。(生) 酒をもつ一杯用意せよ。(丑が酒を捧げ、紙銭を焼き、生が
酒を地にそそぐ科)

二殺 山のように積んだ金色や銀色の紙銭の束、あの世の貴妃のために何万枚も焼く。この紙銭ごときで、どう
して貴妃の降臨を購うことができよう。我が衣は空しく涙に濡れ、耳には泣いて血を吐くホトトギスの怨みの声が
びびく。我が心が、風に舞う灰を追って貴妃と一對の蝶になることもできず、急に悲しみが増すばかり。一体何時
になつたら、天空に鸞鳥が現れ、鶴に乗って遼陽に帰るよつに、そなたの住む世界へ行くことができるだろうか。

(丑) 日も暮れました。天子様、行宮へお戻り下さい。(生) 宮女よ、貴妃の神幕を下ろすのだ。(宮女) かしこま
りました。(神幕を下ろし、内でひそかに木像を持ち上げて退場する科) (生) いざ出発。(丑が応ずる科) (生が馬に乗り、車駕の

隊列が再び登場し、導いて行く科をする) (生)

「殺尾 真新しい祠廟を出ても涙は止まらず、行宮に戻ってもこの心の痛みがどうして忘れられよう。落日と夕焼けを空しく眺めるだけだ。寡人は今夜、そなたと夢のなかで、嘆いても尽きない心情をじっくり語り明かすことにしよう。」

幾筋もの香煙が靈廟の門から漂い流れ出す

かの貴妃は巫山の仙女か洛水の女神か

神像の美しい眉は在りし日の貴妃のよう、

日も暮れて、寡人はただ亡き人を傷むばかり。

曹 鄴

権 徳興

白 居易

封 彦冲

注

(1) 原文は「生拆開比翼鸞鳳」。元・高枳「商調・集賢賓」「怨別」(『全元散曲』所収)に「後庭花」生拆散鴛鴦會、硬分開鸞鳳棲」と。

(2) 原文は「咱掩面悲傷、救不得月貌花龐」。白居易「長恨歌」に「君王掩面救不得」と。

(3) 原文は「人間天上、此恨怎能償」。白居易「長恨歌」に「天上人間會相見、此恨綿綿無絕期」と。